

# 学 長 略 歴

学		歴
年	月	事 項
昭和34年	4月	東京教育大学文学部文学科英語学英米文学専攻入学
昭和38年	3月	東京教育大学文学部文学科英語学英米文学専攻卒業
昭和41年	4月	東京教育大学大学院文学研究科修士課程英文学専攻入学
昭和43年	3月	東京教育大学大学院文学研究科修士課程英文学専攻修了
昭和47年	1月	ロンドン大学（ウェストフィールド・カレッジ）留学（昭和47年6月まで）
職		歴
年	月	事 項
昭和38年	4月	巣鴨高等学校教諭
昭和39年	4月	成蹊高等学校教諭
昭和43年	4月	大妻女子大学文学部専任講師
昭和49年	4月	大妻女子大学文学部助教授
昭和61年	4月	大妻女子大学文学部教授
昭和62年	4月	筑波大学現代語・現代文化学系教授
平成4年	4月	筑波大学現代語・現代文化学系長・評議員（併任2期4年）
平成8年	4月	筑波大学企画調査室副室長（併任1期2年）
平成15年	4月	筑波大学名誉教授
平成15年	4月	聖徳大学人文学部英米文化学科教授・学科長
平成18年	3月	日本橋学館大学学長、学校法人日本橋女学館常任理事（現在に至る）
学会及び社会における活動等		
年	月	事 項
昭和41年	4月	日本英文学会会員（現在に至る）
昭和52年	4月	大塚英文学会会員（現在に至る）
平成10年	10月	英語圏文学フォーラム会長（平成15年3月まで）
平成12年	4月	筑波英語教育学会会長（平成15年3月まで）
平成15年	4月	聖徳大学大学院言語文化学会特別会員（現在に至る）
平成19年	4月	財団法人日本高等教育評価機構「評価員」（現在に至る）
賞		罰
年	月	事 項
		な し

教 育 研 究 業 績 書		
氏 名 横 山 幸 三 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
文 学	英米・英語圏文学	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例  特になし。		
2 作成した教科書，教材  (1) Edna O' brien: <i>The Rug and Other Stories</i> (2) <i>Modern British Short Stories</i> (3) <i>Contemporary British Short Stories</i> (4) <i>Classic British Short Stories</i> (5) <i>British Short Stories of Today</i> (6) <i>Modern British and American Short Stories</i> (7) <i>Modern English Short Stories</i> (8) <i>Contemporary British and American Short Stories</i> (9) <i>British and American Horror Stories of Today</i> (10) <i>British and American Masterpieces</i> (11) <i>Modern British Women Writers</i> (12) <i>British and American Short Shorts</i>	1975 年 1976 年 1977 年 1978 年 1980 年 1985 年 1985 年 1987 年  1987 年 1988 年 1989 年 1990 年	単著、短編集の註釈。 愛育社 田中英史氏との共註。 成美堂 同上。 同上。 同上。 同上。 岩元巖氏との共註。 成美堂 単著。短編集の註釈。 桐原書店 岩元巖氏との共註。 成美堂  単著。短編集の註釈。 金星堂 小栗隆氏との共註。 金星堂 単著。短編集の註釈。 成美堂 同上。
3 教育上の能力に関する大学等の評価  特になし。		
4 実務の経験を有する者についての特記事項  特になし。		
5 その他  特になし。		

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 資格、免許  中学校教諭一級普通免許状（英語） 高等学校教諭一級普通免許状（外国語〈英語〉）	1963年3月 1968年3月	東京都知事 と昭38中1普5437号 東京都教育委員会 昭43高1普127号
2 特許等  特になし。		
3 実務の経験を有する者についての特記事項  特になし。		
4 その他  特になし。		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 『批評—— 文学と言語』	共著	1971年9月	研究社出版	<p>成田成寿教授の還暦記念論文集。掲載論文は、「ヴァージニア・ウルフにおける読者意識」(pp.150-159)と題して、作家がその生涯において、3つの事柄に意識的であったことを指摘した。心の内と人間の死と読者に対してである。読者に対する意識とは、いかなるものであり、それはどのような背景から生まれたのか、またそれが彼女の作品においてどのような意味を担っているのかという問題を考察した。</p> <p>富原芳彰、外山滋比古、郡司利男、玉井東助、倉持三郎、<u>横山幸三</u> 他 総415ページ</p>
2 『伝統と実験—— フォースターと ウルフの世界』	単著	1988年2月	成美堂	<p>20世紀のイギリスを代表するE.M.フォースターとヴァージニア・ウルフについての論考。第一部では、フォースターの主要な作品の分析を通じて、彼がイギリスの伝統的な小説手法の実践者であったことを論証した。第二部では、同時代人であるフォースターとウルフの共通点や相違点について新しい見方を提示した。第三部では、ウルフの代表的な小説と評論を取り上げ、彼女の主張とそれを具体化した実験的作品の検討を行なった。 総217ページ</p>
3 『戦後イギリス文学』	共著	1988年4月	金星堂	<p>20世紀英文学研究会の第2論集。掲載論文は、「&lt;真実&gt;と&lt;笑い&gt;と&lt;語り&gt;——ウィリアム・クーパーの初期3部作について」(pp.27-47)である。作者は、戦後のイギリス小説史の上で重要な地位を占めていながら、日本ではほとんど問題にされていない。そこで、彼の作品の特色を指摘して、彼が「怒れる若者たち」の先駆的役割を果たしたことを立証した。</p> <p>倉持三郎、<u>横山幸三</u>、目羅公和、大平章、田口孝夫、扇令子、平野ゆかり、伊藤誓 他 総258ページ</p>
4 『今日の イギリス小説』	共著	1989年12月	金星堂	<p>20世紀英文学研究会の第3論集。掲載論文は、「批評小説の誕生——マルカム・ブラッドベリー『削除』(1987)」(pp.211-231)小説家・批評家として著名なマルカム・ブラッドベリーの最新作『削除』という作品が、全く新しいタイプの小説であることを、彼の小説化としての足跡をたどりつつ、理論家としての側面をも参照しながら、考察した。</p> <p>船倉正憲、平野ゆかり、山本優子、坂口明德、大平章、大熊昭信、伊藤誓、<u>横山幸三</u> 他 総243ページ</p>

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5 『ミルトンとその光芒』	共著	1989年12月	金星堂	<p>新井明教授の還暦記念論文集。掲載論文は、これまでほとんど論じられることなかったE. M. フォースターの評論についてである。「E. M. フォースターの評論——混沌から秩序へ」(pp. 336-349)と題し、体系的ではなく、一件断片的にも見える彼の評論の魅力は、混沌とした世界が秩序に向かってゆくところにあり、それが人間フォースターの全体像につながると解釈している。</p> <p>野呂有子、佐久間良子、田中英史、田口孝夫、<u>横山幸三</u> 他 総448ページ</p>
6 『現代の英米作家100人』	共著	1997年8月	鷹書房弓プレス	<p>アンガス・ウィルソン、ジョン・ウェイン、ウィリアム・クーパー、ウィリアム・ゴールディング、ジョン・ファウルズ、ティモシー・モウの7人の作家について、その生涯・主要作品リスト・代表的な作品2つを紹介しながら、作風の特色とか作家としての問題点などをろんじたものである。英米作家の最新情報が満載されている。(pp. 22-23、pp. 30-31、pp. 62-63、pp. 68-69、pp. 148-149、pp. 154-155、pp. 190-191)</p> <p>大熊昭信、大平章、田口孝夫、田中英史、長岡真吾、中澤はるみ、<u>横山幸三</u> 他 総306ページ</p>
7 『英語圏文学——国家・文化・記憶をめぐるフォーラム』	共著	2002年4月	人文書院	<p>監修と論文執筆。文学を国家単位で捉える従来の手法ではなく、現在までに世界の各地において英語で書かれた文学作品を、新しい「英語圏文学」という枠組みを設定して読もうとする試みである。国内外の著名な学者や気鋭の研究社の参加を得て、多彩な内容の批評論集となった。このところ、やや沈滞気味のわが国における文学研究を活性化するための起爆剤になるのではないかとの評価も得た。(はじめに pp. 1-2、担当ページ pp. 396-408)</p> <p>別府恵子、竹谷悦子、大熊昭信、巽孝之、坂口明德、長岡真吾、腹部千代子、<u>横山幸三</u> 他 総424ページ</p>
8 『英米の批評・随筆』	単著	2005年4月	聖徳大学	<p>聖徳大学通信教育部英米文化学科の専門科目「英米の批評・随筆」のテキストとして執筆したものである。第一部が「随筆」、第二部が「批評」、第三部が「理論」という構成で、各作品からの豊富な引用とその詳細な註釈が特色となっている。著者の懇切丁寧な解説が受講者の理解に役立っているようだ。 総203ページ</p>

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文)				
1 「E. M. フォースター『象徴的瞬間』論」	単著	1966年4月	『成蹊論叢』第5号、pp. 23-40.	最も自伝的小説であると言われている長編第2作『いと長き旅路』の中で、主人公のリッキーに語らせている「象徴的瞬間」という考え方が、実は他の作品にも表れており、作者フォースターの一貫したテーマであると見做す。その観点から、5つの長編小説を詳細に分析し、最終作に至って作者の人生観の完結を確認したことが、1924年以降における彼の小説絶筆の最大の理由ではないかと推論している。
2 「テーマと手法——続・E. M. フォースター論」	単著	1967年4月	『成蹊論叢』第6号、pp. 18-33.	前記論文を、理論面から実証しようとした論考である。1927年に発表された『小説の諸相』は、フォースターの小説論としてあまねく知られているが、その理論を彼の小説に具体的に適用して考察するという方法論は当時あまり採られなかった。論者は、フォースターが提唱している小説論が実際に彼の作品においてどのように応用されているかを実証的に分析し、最終作でテーマと手法の両面が見事に一致しているという結論を得た。
3 「ヴァージニア・ウルフ論——物語性の克服」	単著	1969年3月	<i>Ohtuuma Review</i> , No. 1 pp. 29-30.	ヴァージニア・ウルフは、生来のストーリー・テラーではなかった。また、19世紀の作家たちのように、外面描写に満足できる小説家でもなかった。アーノルド・ベネットらを非難して「物質主義者」と決め付けた一方で、自らは人間の内面を見詰めることの大切さを主張したが、代表作の一つとされる『ダロウェイ夫人』では、外面描写に代わって「トンネル工法」と名付けた手法を編み出したことで、物語性を克服したと評価した。
4 「戦後英米文学(4): John Wain」	単著	1969年	『英語教育』7月号、p. 47.	戦後のイギリス文学と言えば、「怒れる若者たち」の活躍を抜きにしては語れぬとされているが、その中でもジョン・ウェインの存在は大きい。詩人として出発した彼が、やがて人気作家として話題作を次々と発表して、文壇の中心的人物となったばかりでなく、学会でも優れた業績をのこしたその足跡を辿って、今後の動向を占ってみるといふ内容の論考。
5 「事実と幻想——ヴァージニア・ウルフ試論」	単著	1970年3月	<i>Ohtuuma Review</i> , No. 2 pp. 22-31.	「意識の流れ」の小説手法で知られるヴァージニア・ウルフは、モダニズムの作家たちの間で最も難解な作家とされている。しかしながら、作品と読者の関係から考えてみると、思いがけない側面が発見できる。すなわち、作品の理解を一方向的に押し付ける伝統的な小説とは異なり、ウルフの作品は読者の強力を求めるといふ要素が多い。そのことがわかりさえすれば、彼女の作品理解はさほど難しくはないというのが、その結論である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 「E. M. フォースターの短編について」	単著	1971年7月	<i>Otuka Review</i> , No. 8 pp. 84-95.	フォースターは彼の短編を「幻想」と呼んでいるが、その一方で「写實的」な短編も存在する。長編小説家としてのフォースターはイギリス小説の伝統的な手法の継承者として高く評価されてきたが、それだけに「幻想的」な傾向の強い短編作品との距離が大きいように感じられる。しかしながら、本来は詩人的な資質に恵まれていた彼が、その本領を十分に発揮できる分野はむしろ短編作品ではなかったかという新たな解釈を提示した。
7 「 <i>Between the Acts</i> 序論——主としてその評価をめぐって」	単著	1975年3月	『大妻女子大学文学部紀要』第7号、 pp. 1-13.	ヴァージニア・ウルフの最終作である『幕間』は、これまでに批評家の間でその評価が大きく分かれてきた。彼女の最高傑作は、『波』であるという評価が大勢を占めているが、近年は必ずしもそうとばかりは言えない。むしろ、未完の遺作と見做されてきた『幕間』こそが、作家としての完成という観点からすると最高傑作と考えるべきであるとする昨今の評価の傾向を、1942年以降の研究書を広く調査した上で、実証的に提示した。
8 「ある変身の物語——Evelyn Waugh: <i>Men at Arms</i> 」	単著	1978年	『英語教育』3月号、 pp. 46-47.	一般に風刺的な小説家として知られている Evelyn Waugh だが、彼の戦争小説3部作の第1作の主人公 Guy Crouchback は、文字通り作者の分身と見做されている。その彼が、戦争体験を通じて自己発見をし、鮮やかな「変身」を遂げる経緯を作品の中に読み取ると同時に、作者自身にも作家としての「変身」が訪れたことを指摘した。
9 「短編小説の終わりについて——‘The Road from Colonus’を中心に」	単著	1979年7月	<i>Ohtuma Review</i> , No. 12. pp. 15-30.	写實的な短編小説である「コロノスへの道」は、作者のフォースターにとってきわめて重要な作品である。その理由は、彼の長編小説におけるテーマと手法の特色が最もよくあらわれている作品だからである。だが、この作品では短編小説でなければ用いられぬ独特の「どんでん返し」という技法が駆使されていることを指摘し、併せて「象徴」という近代的な手法も効果的に活用されていることから、作品の完成度を高く評価した論考である。
10 「学者と小説——戦後イギリス小説の一側面」	単著	1980年7月	<i>Ohtuma Review</i> , No. 13. pp. 50-65.	戦後のイギリス小説を特徴づけるのは、伝統への回帰であると言われているが、論者の見解によれば「学者小説家」の活躍も見逃すことはできない。とりわけ、マルカム・ブラッドベリーとデイヴィッド・ロッジの2人の活躍が一際目を引く。本論では、イギリス小説の流れの中にこうした「学者小説家」の系譜が認められるのではないかという仮説を提唱し、E. M. フォースターがその先駆的役割を果たしたと主張している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11 「E. M. フォースターと同性愛」	単著	1981年	『英語教育』12月号 pp. 44-45.	20世紀初頭のイギリスを代表する小説家の一人であるE. M. フォースターが、正真正銘の同性愛者であったことが死後に出版された長編小説 <i>Maurice</i> (1971) その他によって明らかにされた。彼には少なくとも4人の恋人の存在が確認されている。こうした伝記的事実を踏まえて、改めて生前に発表された作品を読み返してみると、新たな解釈も生まれてくるし、作家像の見直しを迫られることになること述べている。
12 「E. M. フォースター小論——小説の絶筆と同性愛をめぐる」	単著	1982年8月	<i>Otsuka Review</i> , No. 18. pp. 48-56.	フォースターが死後になってからの出版を許したとされている遺作『モリス』は、作家をめぐるこれまでの評論や解釈に大幅の変更を求めることになった。従来、最大の謎とされてきた1924年以降における小説の絶筆に関して、その理由が彼の同性愛の性癖にあったのではないかとという新しい解釈を提示した。曖昧模糊とした作家の人柄や作家としての捉えがたさなども、彼が同性愛者であったことが主たる理由であると主張している。
13 「John Fowles の世界(I)」	単著	1984年3月	『大妻女子大学文学部紀要』第16号 pp. 15-28.	現代は「ポスト・モダニズム」の時代であり、「メタ・フィクション」と呼ばれる新しい小説形式がもてはやされている。この方面において、イギリスの第一人者とされているのが、John Fowles であることは衆目のいっちするところである。本論は、彼の初期の短編2作と長編小説の第1作 <i>The Collector</i> (1963) を取り上げ、彼の小説技法、とりわけ「複合的視点」を指摘して、この作品の構造を明らかにした。
14 「文学社会学に関する覚え書」	単著	1984年7月	<i>Ohtuma Review</i> , No. 17. pp. 17-27.	「文学は社会を映す鏡である」という考え方は、自明の理であるにもかかわらず、このところ比較的小おそかにされてきた。文学研究、とりわけ小説に関する研究においては、社会的な見地から考察されるべきであるとの立場から、「文学社会学」を提唱する。この分野の歴史を概観し、イギリス流「文学社会学」の特質を明確化する必要性を説いている。
15 「John Fowles の世界(II)」	単著	1989年3月	『言語文化論集』第28号、pp. 39-53.	John Fowles の長編小説第2作 <i>The Magus</i> (1965) は、自伝的な作品とされているが、それだけに作家の全体像を把握する上で、重要な位置を占めている。そこで、この作品の構造を分析するために、専攻して発表されている2つの短編作品を検討し、それらがこの〈自伝小説〉の原型となっていることを指摘し、その作品世界が〈立体化〉されていることが特色で、〈メタ・フィクション〉の所以であるとする。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16 「ブルームズベリー・グループと E.M. フォスター——文学社会学的考察」	単著	1991 年 3 月	『筑波英学展望』第 12 号、pp. 13-24.	20 世紀初頭のイギリスに発生した「ブルームズベリー・グループ」とは何か。まずは、通説を修正した上で、E.M. フォスターがこのグループとどのような関係にあったかを明らかにする。その結果、フォスターが周辺の存在であったこと、それに対してヴァージニア・ウルフはグループの中心にいたことを確認し、その理由を彼の〈音楽性〉に対する彼女を代表とするグループの〈絵画的性〉に帰するという文学社会学的解釈である。
17 「映画と小説—— <i>Howards End</i> をめぐって」	単著	1993 年 3 月	『筑波英学展望』第 13 号、pp. 11-25.	近年相次いで映画化されている E.M. フォスターの長編小説の中で、最も評判の高い『ハワーズ・エンド』を取り上げ、映画と小説の両面から彼の作品世界を考察しようとする論考である。映画でなければならない表現、逆に小説独自の表現があることを具体的に指摘しながら、改めて原作の評価を試みている。この作品には「欠点認められる」が、意外にも作品の基本構造が緊密であり、それが映画化成功の要因にもなっていると主張している。
18 「作家の伝記——マーガレット・ドラブルのアンガス・ウィルソン伝をめぐって」	単著	1997 年 2 月	『筑波英学展望』第 16 号、pp. 3-12.	戦後のイギリスを代表する小説家のマーガレット・ドラブルが、先輩作家であるアンガス・ウィルソンの精密な伝記を出版した。二人の交流、新事実の紹介、数々の興味あるエピソード、フォスターとの関係、旅行好きの側面など、人間ウィルソンの実像を浮かび上がらせていることを指摘。究極的には、伝記ジャンルの問題にからめて、この「ウィルソン伝」出版の意義を述べ、この著作が超一流の伝記文学になっていると高く評価した。
19 「作家と同性愛——E.M. フォスターとアンガス・ウィルソン」	単著	2000 年 3 月	『筑波英学展望』第 19 号、pp. 1-19.	E.M. フォスター(1879-1970) とアンガス・ウィルソン(1913-1991) の二人は同性愛者であったが、その死後に発表された各種の伝記によって、その実体が明らかにされた。まずは、二人の関係がどうであったか、それぞれの作家としての活動時期、取り巻く社会環境、生来の性格と考え方などを紹介し、極めて対照的な生涯であったこと、にもかかわらず共に人間的な魅力に満ちていたことを強く指摘した。
20 「内なる異邦人の目——ティモシー・モウの文学世界」	単著	2002 年 4 月	『英語圏文学』人文書院、pp. 396-408.	中国系イギリス人作家として、目下注目の的となっているティモシー・モウの初期作品 2 編について論じたもの。第 1 作『孫悟空』(1978) は、香港が舞台でポルトガル青年の異文化体験の物語。第 2 作『酔豚』(1982) は、ロンドンでの中国人一家の移民生活の物語。この 2 作を通じて、作者のモウが目指している文学世界が、イギリスに限定されるものではなく、「英語圏文学」という新しい方向性を示していると大胆に論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21 「逆ユートピアか幻想か——アンガス・ウィルソンの『動物園の老人たち』をめぐって」	単著	2003年6月	『20世紀英文学再評価』金星堂、pp.173-190.	アンガス・ウィルソンの小説第4作目のこの作品については、従来からその評価が二分している。論者は、様々な角度から作品を分析した結果として、「意欲的な作品」との結論を与えている。その理由として、この作品に作風上の変化、すなわち「写実」から「実験」あるいは「幻想」へと移りつつあることが認められるという。この「近未来小説」を経たことで、作家の「リアリズム」へ回帰を指摘している。
22 「英語圏文学とは何か——J. M. Coetzee の場合」	単著	2006年2月	聖徳大学言語文化研究所『論叢』13号、pp.391-426.	イギリスの著名な文学賞を二度も受賞したばかりでなく、2003年度のノーベル文学賞にも輝く、南アフリカ出身の作家 J. M. Coetzee について論じたもの。まず、作家の生涯と作品についての紹介から始まり、次いで、主要作品についての解説を経て、彼の代表作とされる『恥辱』(1999)を中心に、その目指す文学世界が、まさに「英語圏文学」そのものであることを指摘して、今後の方向性を占っている。
(その他)				
1 項目執筆	共著	1976年11月	『講談社和英辞典』講談社	清水護・成田成寿(編)
2 「ウォルター・スコット『獅子王リチャード』」	単著	1978年9月	小学館	作品案内(作家と作品についての解説)
3 「ウォルター・スコット『アボット』」	単著	1978年11月	小学館	作品案内(作家と作品についての解説)
4 「現代英米文学を読む——アラン・シリトウ『長距離走者の孤独』」	単著	1984年9月1日号	『毎日ウィークリー』毎日新聞社	作者の紹介と作品のあらすじ・その他
5 「文化研究と外国語教育」	単著	2000年3月	『筑波英語教育』第21号	巻頭言(2ページ)
6 「外国語教育における文化研究の役割について」	単著	2001年3月	『筑波英語教育』第22号	巻頭言(2ページ)
7 「イギリス文化研究の現状について」	単著	2002年3月	『筑波英語教育』第23号	巻頭言(2ページ)